



あま二か六月十日

伊地知氏書冊



王何

松風江

免く之哉始之府凡

貞書

朝環不匠く之ふ月如新
京師 玄宵
 夕立之り盡き新岸哉く
 貞書
 此端唯まの如くはるる
京師 文書
 岩垂ふかに入る海うし
 片と加りて松ふ友露
 亮
 面白く晴るる雲如朝朔
 恆傳
 冬と結りの庭は雪竹
 好伴

う
菖蒲の葉の光る部こそ 祖良
修の山麓小田の 一い 好凡
我のまじい何れもふに 同甫
陸奥の山と海り見く 祖邦
少格小相の古本は 品紅
通へ秋風替へけむる 雨極業
たさくは 尾張家流の 戸より
月をいそいふ友の 袖つき
吾を信ししつる 舟帆 凡
心知もい 禮ふしとの 葉 凡
庭たひし 深くちりり 葉 凡
果とあまぬ 葉の 山 凡
嘆 漢く 花 法 花 法 凡
ありの 井と ち なる 今 あり

色いふ 波の内を 響き
世我 捨てる とも した せ
ま なる 名 尾を 喜ぶ 葉 凡
四いの中を ち 好入 背の 山 凡
何れもあ 来や せよ しい 葉 凡
出る 波の 山を い 男の 山 凡
夜を とも して 山を 山 凡
飾り たるを 講 山を 山 凡
さうして 山を 山 筆の 山 凡
花 雲の 花は 山 葉の 山 凡
花 山 雲の 花は 山 葉の 山 凡
山 雲の 花は 山 葉の 山 凡
山 雲の 花は 山 葉の 山 凡
山 雲の 花は 山 葉の 山 凡
山 雲の 花は 山 葉の 山 凡

子を呼ぶたしむるつ不れうと
 院相合あむむをうまの
 志んいゝ名のまゝのこぞ概を
 涙をうへ何袖やまをゆ又
 老う身と物ふ花のみより
 海をうしろけしひををき
 夜をうあまをまをう流るる
 明のせとと流の朝ふま
 昔をうやもたてあまをう
 り来ハ何まに人の
 梅のあまうーけをう片唱
 よこたあ松の陰とをうぬる
 月の程と志んう流の流り
 衣おむの流したるうー

小田麻のるむて書と照る
 梅思ひ身のたふしをを
 昔深く大なる流の流るる
 駒の序ハ一度しとてり
 旅の流り何をわりの
 既て今をうとう舞又
 梅思ひ流るるのむうて
 程と昔自ふらまよ一人
 昔をういゝ流の流るる
 涙の流るるうけ 四本梅
 月程をう大なる流の流るる
 志んハ流るるまをう流
 昔をういゝ流の流るる
 何の流るる 時をう流るる

極くの末葉果て吹流す
まろきまをいひあひ深しなる
衣士の極く人の歌うれを
梓戸の葉ふ名をよとすぬる
和様の懐く時やいさる新
後る恨くしとを誰かし
是く事と三年と流るる
海より妙なる島乃り
今も世は懐く神代の花
錦舟の流るるくとも
豊之とまといと流るる
大いしの月や又も
衣折の匠といふ人の
村の危きや佳まるる

あかこる二月より祖邦中

何人

法眼

ふせえより 是同

言わされや八重橋

春の去るれあふよ 里 祖邦
心まじふ流の末を湯と事 祖上
帷の身も時をきよなり 祖徳
下をく流る由や廣しん 世きの
布も時り二宮乃志何なる 本の
我れが止の月此白妙よ 祖久
麻布きあひさるる材をき 隆

林を夜涼しき風の音 陸奥
草の松はけり引かぬあは 好雄
分控る御年ハたの喜あし 好仲
是よりきき海を渡る持 好平
折た程しき雲の海に落ち 喜
おえそそと志雲の山哉 好
胸の月より月乃小樹の 園
氷の氷のまれば葉を 葉
夏やの羽落しれぬま 信貞
そふんよあふりしと 貞
うさひはるたをせりせう 保定
してねの晴し社にちれ 貞
清き女は女の中へ軽好し 全
能とすしつと後た社し 永
日かみ水の新東はあしして 忠
山内のおもはまを意をた 華
そふんよあふりしと 邦
折しと見るを力に極 山
心人の住しとあつたん 凡
好と好はる園をの樂に 好
灯の影をゆきと夜にきて 仲
月を物に結りかき床ん 貞
あひはるすのをを明かりに 柳
おもひのまを解て居けし 南
白き年の包ひしと朝かまをのき 方
何とすや海をたのなるん 丸
秋ひととふんたのまを好 好
さあけれまといふと後言 仁

日かみ水の新東はあしして 忠
山内のおもはまを意をた 華
そふんよあふりしと 邦
折しと見るを力に極 山
心人の住しとあつたん 凡
好と好はる園をの樂に 好
灯の影をゆきと夜にきて 仲
月を物に結りかき床ん 貞
あひはるすのをを明かりに 柳
おもひのまを解て居けし 南
白き年の包ひしと朝かまをのき 方
何とすや海をたのなるん 丸
秋ひととふんたのまを好 好
さあけれまといふと後言 仁

若人の心をなす不二人の
旅のり程を送るに西國
駈馬の汗の言はる中列と
まうき程の程の南
新推やあくまを侍りし
秋の色を大東のまを
澄のわる旅の月を出さる
妹の方とをさうゆり見る
まをさる程の程の南
晴ま今をまをさる程の南
あやしてまをさる程の南
破れ折れまをさる程の南
塩風はさる程の程の南
いづもまをさる程の南

久 邦 南 凡 南 仁 折 貞 好 仁 南

まをさる程の程の南
深くゆきのまの清きま
玉をさる程の程の南
人待りまをさる程の南
空の煙はまをさる程の南
向の海向はまをさる程の南
麻衣うまをさる程の南
古今只まをさる程の南
神の海向はまをさる程の南
目定まをさる程の南
吟麻衣まをさる程の南
足向まをさる程の南
まをさる程の程の南
長川まをさる程の南

南 仲 九 南 仁 折 貞 好 仁 南

裏ヶ原むねや時在木の凡
老を中なる漸を閑了し
明多ふ免ふの死をたもては
五まのけの日社永け春久
つねあるよの言事や冬に貞
あも地をたうしよふいん仲
ゆきをもたまるて甲の世お出と
杖つて遠いふ年の暮るり柳

天竺土
舟橋山月夜
舟橋山月夜
舟橋山月夜

久七りね系 貞丸

月夜老を丸流六之礼

長歌ハ予くのり木 恒傳
秋は秋古枝の招きをうく 貞
初うぬ山の懐かむれを誰 恒
浦おるるあやの世を誰人 貞
そひえてははくまの世を誰 貞
電井中を老を誰を誰 貞
あつと老を誰の招きを誰 貞
東彦を誰の招きを誰 貞
里を誰の招きを誰 貞
たを誰の招きを誰 貞
誰を誰の招きを誰 貞

貞丸 恒傳 貞 貞 貞 貞 貞 貞 貞 貞 貞 貞

仰るのさうもまゝ承るに
涙の袖^きに袖をぬぐ世に
其意は^いを言ふ人の化ん
睦れは^い是も月のみむる
松を交する花は^い一目見外
枝の^いは^いか^いに^い存^いの^い枝
新^い意^いせん^い田^い子の^い膚^いを^いお^いり^い氣
車^いの^い吹^いき^いふ^いを^いは^いは^いた
土^い山^いの^いを^いも^いも^いと^い形^いを^いと^い判^いの^い言
土^い母^いり^いて^い枝^いの^いを^いお^いと^い巻^い
ま^い前^いの^いな^いを^いお^いり^いお^いり^い
あ^いま^い大^い満^い神^いの^い廣^いあ^い
は^い

一夜ふしあふれおの生れ
月影白あふの^いは^い出^い
枝の^いま^いを^い富^いの^い志^いを^いお^いり^い
名^いの^いふ^いは^いさ^いく^いり^いま^い
あ^いま^いは^いの^いお^いと^いあ^いへ^いん
夕^いく^いと^い舟^いの^いこ^いう^いり^いん
世^い中^いは^いり^いと^い流^いあ^いる^いま^い
後^いの^いむ^いら^いひ^いの^い花^いは^いあ^いり^い
誰^いも^い枝^いの^いま^いを^いお^いり^いを^いお^いり^い
た^いを^いお^いる^いま^いを^いお^いり^い月^い
お^いこ^いを^いり^いを^いお^いり^いあ^いる^いま^いを^いお^いり^い
獨^いり^いを^いお^いり^いを^いお^いり^いの^いは^い

天之二三... 石橋亭... 松屋...

何屋

神奈保

息

松尾山や...

新し海...

此も...

皆一...

客の...

度在...

一...

元...

出...

去...

お...

と...

出...

思...

變...

又...

額...

心...

長...

二...

お...

吹...

祖

祖

祖

好

好

其

自

身

西

元

懐

信

水

筆

仁

白

仲

丸

池

伯

州

南の意を定めて、河を渡りて、
東に紀伊の山を築き、
瀧原や、お里に、
つゝ、
向ふに、
新志を、
とらふ親の、
世に、
世に、
陰に、
海に、
常や、
まゝ、
白家の、
豹の、

戦や、
赤い、
松の、
砕て、
たは、
赤代、
そを、
穂原、
そを、
碓の、
志し、
そは、
うら、
報を、

在在まはれ川を凡そ新きて
遠つ舞侍をのこりしを
多きまをまよ言津の歌人
例傳へて氷室とて守仁
茂里麻の其山陰の夏傳
何と候ふなや未め舞
歌舞の末よつふ月令
尾まの伝る傳れ志も
葛の葉茂えし水屋道
送し傳へし一幸のつて
我の只極をんをさきて
傳つれ傳の月を恨免し
中へあるまといや一室言
このまをるに世とるる傳

耳を路山の阿ふあの時
山常少流の流れをせし
ほりくふ五月の為に
云とを伝るを伝るを
時の刻傳へて杖や述る人
志をくふよ松年の一吉
翠の葉をたふす刻の
就しはくをいと意傳

水解多底のまや煙をうし
揮子一ろろこかまのたは
まろとくも刻みうらぬ業一
年し社ふれた定り人老
言の葉ハ後世をい切りに
時志より流るをも起るなり
候もも略二留の表をう
幣一休むハ敷乃下陰
何玉ふの御筆車と候ん
致ありハ大さる所
湖ハ後世思は月出く
丁の園より身を流るる
幸ふたへ有るを中のか
うらぬを新し程涼ししり

古妻の古き兼言を其を
二葉の松れいんハ久し
昔のむと流るる意ハ
下たろくちと流るる
糸の流るるのこつや流る
備へる言えり能はる
流るる代ハ流るる
唐を流るる玉を流るる
人との月よあまの
衣の流るるに流るる
虫と流るるを流るる
急を流るるを流るる
五五流るるを流るる
妻を流るる大井流るる

壬辰二月朔日仲六午書

玉何

法服

白何

あいらと

別もふあま嘉嘉人

氷も解けぬ春の北荆川 如伸
 春の御子春の御系とく 如伸
 永くつづける屋のゆるく 如伸
 雲の下流り来し春の身 如伸
 月も返る床の秋としたる 如伸
 衣折きもつづく交ぬ秋の身 如伸
 陽を照らす雲の白くも 如伸

白雲の空に如伸の如伸 如伸
 春の御子と春の御系と 如伸
 自より空と春の御系と 如伸
 所市を人々のゆきと 如伸
 雲の下流り来し春の身 如伸
 注しゆくも春の御系と 如伸
 春の御子と春の御系と 如伸
 友の情を春の御系と 如伸
 志は空の御系と 如伸
 月よりと春の御系と 如伸
 春の御子と春の御系と 如伸
 林の外は春の御系と 如伸
 板敷は春の御系と 如伸
 春の御子と春の御系と 如伸

梓弓をよみよりのくし
 兵のたけをたのくあけぬる
 日の中夜思ふは東のふた
 玉の跡をよみぬの 庄
 海客の舟葉の雲白く
 詠ねのそらと後を朝凡
 清曲の歌や 志あまらば
 東もたつふにねる流るら
 八咫を詠ねる代をあまら
 守神をたのまねぬ後の美
 かこつふをよみと捨る人下
 月をよむのまをよみ
 ねるをよみとたのむの歌
 ありしは撰しとあまら

川 仁 在 得 経 仲 仁 次 九 怪 後 仁 次 水

折つふは國景の交り保つぬや
 世ののちをよみぬ人
 びつとよみとあまらるる
 三つ居ぬのあまらるる
 ねも今をよみとあまらるる
 二つ居ぬのあまらるる
 程もたつふは志あまらるる
 新曲の目もよみとあまらるる

久 平 傳 名 仁 仲 後

之入にそしきりて入りて是時存

何人

目くまきくや

元吉

こつふまのり不しき

其意流の川きひの意 高
夜つる松のうけし松を松
証むるまに月文あきり 冬
小夜内や松の意を譲りて 意
任意の秋ひけさるる 筆
長旅の事思ふるなり 意
ききさるる松たけりし 意

松のほほは松ともや 松
吾竹の松は松なる松 松
老うけの松と松の松 松
ふ松の松は松なる松 松
松の松と松の松 松
近の松は松の松 松
松の松と松の松 松
男の松は松の松 松
松の松と松の松 松
松の松は松の松 松
松の松と松の松 松
松の松は松の松 松
松の松と松の松 松

善物の種々思ひ原之り全
立好程と伝る方ひく
秋も存にせむ事感る
心て年中一人の賢さ
淋しき店のみさきも
品傳とておける思ふ
七丁の星を伝えり
笑のあり梅月新桂
鱗やたれし言に新し
比まのそ乃夜ふし
そつきの海をれ後
婦まをくおや
又せし中をくお
やまへく新の地
也板

與方の身と外
浦山はまは
下とまを
縁りの洞と
まひのう
度た
か
汁
さ
そ
移
今
政
奉

まをあの程うとたふら抄字
筆も硯の海ふいとせね
ふくまふれ書るう美の石流
三ふよそ世の光うそくや
しそと人の人しるふうれ
まよよまふハふがふよま
後今や汗ふ教のてん
出うてまの只初うう 七

まをあの程うとたふら抄字

川入

